慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | H・アーレントの政治哲学における教育の位置について |
| Sub Title | |
| Author | 朴, 順南(Park, Sun-nam) |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院社会学研究科 |
| Publication year | 2006 |
| Jtitle | 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.62 (2006. ) ,p.179- 182 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 平成17年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000062-0179 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

・口頭発表 「ニーチェの人間形成論における思想構造—Bildung 概念の分析を通じて—」教育哲学会第 48 回大会（於香川大学），2005 年 10 月.

・図書紹介「曽田長人著・『人文主義と国民形成—19 世紀ドイツの古典教養—』」『ディルタイ研究』第 16 号，2005 年 11 月，pp. 192-199.

・掲載論文「初期ニーチェにおける陶冶論と教育論—Bildung 理解を中心として—」『哲学』第 115 集（慶應義塾大学三田哲学会），2006 年 2 月，pp. 1-23.

## 主要参考文献

Karl Jaspers, *Nietzsche.-einführung in das Verstandnis seines Philosophierens*, Berlin, 1936. Nachdruck (Berlin, 4. Auflage, 1974.)

曽田長人『人文主義と国民形成—19 世紀ドイツの古典教養—』知泉書館，2005.

Fritz Ringer, *Fields of Knowledge. French academic culture in comparative perspective. 1890-1920*. Cambridge University Press, 1992.

加藤守通「薬としてのロゴス—西洋教育史におけるレトリック・ヒューマニズム的伝統の再考」『近代教育フォーラム』(11), 2002.

三輪貴美枝「Bildung 概念の成立と展開について」『教育学研究』61(4), 1994, pp. 353-362.

野田宣雄「ドイツ教養市民層の諸問題」『法学論叢』132 巻，京都大学法学会，1993.

# H・アーレントの政治哲学における教育の位置について

朴　順　南

## 研究目的

本研究は，政治的人間という人間像を土台とする H・アーレントの哲学の中で，教育という営みの置かれる位置を明らかにし，最終的に彼女の遂行した伝統的ヨーロッパ哲学批判の文脈において教育にどのような役割の変化が生じるのかを検討することを目的としている。アーレント研究はこれまで，主に政治哲学・思想研究の文脈で盛んに行われてきており，近年では関連諸分野でも研究の気運が高まりを見せている。しかしその反面，多くの研究はアーレントをあくまで狭義の政治哲学の文脈の中で取り扱い，必ずしも体系的なまとまりを持たない彼女の哲学全体の見取り図を正確に構築する作業はいまだ成し遂げられていないと言える。彼女の哲学の根本的基礎にある「政治」概念自体が，今日に至るまで様々な解釈を通じて理解されてきており，その中には基本的な誤解を抱えたものも少なくないのが現状である。アーレントの主な文筆活動は 1941 年のアメリカ亡命後に始まり，彼女自身，哲学者ではなく政治学者と見なされることを望んだが，彼女のきわめてユニークな政治理論はヨーロッパの伝統哲学との徹底的な対決の中から生じてきたものであり，とりわけ若いアーレントに決定的な影響を与えたハイデガー哲学からの影響関係抜きには決して十分には理解されえないものである。残念ながらそうした意味での研究はいまだ十分になされていない。

本研究はそうした先行研究の現状の課題を踏まえた上で，アーレント哲学の源泉となっている伝統哲学批判および現代社会批判の文脈から説き起こし，その批判を近代教育思想の展開に重ね合わせなが

ら，アーレント自身が十分に語っていない教育論の可能性を発掘することを目指している。2005 年度の研究では，まずアーレントの哲学批判および現代社会批判のための基本的概念枠組みであると考えられる「世界」概念の分析を行った。今年度の研究の成果は，10 月に開催された教育哲学会大会において，「ハンナ・アーレントにおける「世界」概念の考察―その教育学的意味について」という題目で発表し，同テーマに関する論文「ハンナ・アーレントにおける「世界」概念―教育と権威の位置づけをめぐって―」が『哲学』第 115 集（三田哲学会，2006 年 2 月）に掲載された。

**研究概要**

本研究では，アーレント哲学における「世界」概念の二つの側面を明らかにすることを試みた。アーレントの「世界」概念は，ハイデガーの実存論＝存在論における「世界」概念と密接に結びついており，人間が投げ込まれているある種の存在様態を表している。「世界」概念の第一の側面は，人間独自の存在様式を条件づけるものであり，アーレントの政治的行為の哲学の観点から見る場合，その最も重要な特徴は「複数性」(plurality) である。「世界」は，複数の人々のあいだ，現れの空間，政治的に行為する人々の共同性を担保するもの，という表現形式をとって記述される。

アーレント哲学の根本的モチーフのひとつは，伝統哲学が解釈してきた「主権的自由（自由意志）」という自由の観念を脱構築し，政治的行為において経験される非主権的な自由の観念を回復することにあると言える (Villa 1995)。「主体の自由」や「主権性」の観念を基盤とする近代政治哲学が，その正反対の出来事とも見える全体主義支配とある種の連続性を持っていたことを論証しようとするアーレントは，そのオルタナティブとして，人間の行為の領域を因果連関的な認識枠組みから解き放ち，行為を複数の人々のあいだで生起する無根拠・無目的な現象として捉え，その領域に固有の不確実性，偶然性を承認する新たな政治観を求める。ハイデガー哲学における存在論的転回を足がかりとして，アーレントは，行為という人間に独特の存在様式を，複数の人々に見られ聞かれる「現れ」(appearance) の空間において回復しようとする。

アーレントはこの観点から，政治的行為の範型を，古代ギリシアのポリスをモデルとして，他者をいかに説得するかという「卓越性」の競技 (agon) として描き出す。しかしながら，アーレントはたんに行為の美学化によって英雄主義や審美主義の政治論に陥っているわけではない。行為の判定を行為者自身にではなく，それを見聞きする人々の判断に委ね，行為を一貫して公的な現象として捉えることによって，彼女はニーチェの「存在の美学」が陥った芸術主義の限界を乗り越えていると言うことができる (Villa 1995)。それゆえ競技として行われる政治は，主観的目的同士の際限のない闘争に転じるのではなく，人々の間に共有される「世界」への関心に支えられた美的判断によって一種の統制力を得る。ニーチェやハイデガーの哲学とアーレントの哲学の差異は，彼女の哲学が「世界への愛 (amor mundi)」に支えられているという点にあると言える。彼女の政治哲学においては，人々が住まう「世界」を致命的な破滅から救い，もはや伝統や手摺の失われた時代になお「世界」を保守する (conservate) ために，どのような認識枠組みの転換が必要かという関心が何にもまして先行しているのである。この場合の「世界」概念は，もはや前述したような政治領域の構造的要件にとどまるものではなくなっていく。

本論で注目するアーレントの「世界」概念の第二の側面は，『人間の条件』の中心的な議論を支えるものであるにもかかわらず，政治的行為と直接のかかわりを持たないという理由のために軽視される傾向

にある。まず，アーレントは周知の「労働」,「仕事」,「行為」という人間の活動の区分において,「仕事」すなわち人間の製作活動を支える条件を「世界性」(worldliness) と呼んでいる。また別の箇所では，彼女は独自の視点から近代に生じたさまざまな変化を「世界疎外」(world alienation) の過程として描き出している。

ここで「世界」に付与される特徴は「耐久性」(durability) と「永続性」(permanency) であり，それを拠り所としてリアリティやコモンセンスが生じるとされる。彼女は，近代の技術発展によって生じた人間を取り巻く環境の根本的変化によって，人々を相互に結び付けていた自明なリアリティの「世界」が急激に失われていったことを問題にする。本来「仕事」の役割は，荒々しい自然に対して加えられる暴力的改変であり，人工物によって自然に朽ちてしまうことのない安定した道具や住処を確保することである。しかし，産業技術と自然科学の発展の中で自然が自由に操作可能な対象となると同時に，人工物もその役割を失い，物は自然と同じようにはかなく消費されるものへとその性格を変えていく。アーレントは，近代的プロセスの中で，人間の生活全体がもはや「世界性」を支えとしないものになり，文化，芸術，政治といった本来「世界」を前提として成り立ってきた領域から，客観的意味が失われていく様子を描く。

この近代的転回は「伝統」と「権威」の崩壊と表裏一体の関係にある。明らかに「伝統」や「権威」は，アーレントにおいて,「耐久性」や「永続性」のカテゴリーに属しており，これらはアーレントの政治的行為の「自由」のカテゴリーと，その本性上，対立する。政治的行為の自由は，行為に外部の目的を規範として持ち込むようなあらゆる「権威」から解放されるところで初めて可能となるし，行為の「自由」の意義は根本的に，旧来のものに支配されないまったく新しい出来事を創始するところにあると考えられているからである。それゆえ多くの論者は,「権威」の崩壊という近代の出来事が，アーレントの政治的行為の哲学にとってまさに望ましい出来事であると解釈してきたが，アーレントが権威の崩壊について論じるところには，たんに軛からの解放が謳われているわけではない。そこで人間は「世界に投げ返されたのではなく，自分自身に投げ返された」。すなわち，精神や自我のうちでさまざまな虚構を生み出しそれを自由に操作する強力な力を得た代わりに,「世界」における安定性や共同性といった支えを失ったとするのが，彼女の「世界疎外」という時代観である。

「世界」概念の二つの側面の分析を通じて，本研究は，従来のアーレント研究において強調されてきた行為の「自由」の裏側に,「世界」の保守という一見矛盾するモチーフが貫かれている点に注意を促そうとした。このことは，現代社会における教育の危機を権威の崩壊によって説明し，教育において権威を不可欠のものとして論じるアーレントの教育観を理解する上でも重要な視点であると筆者は考える。現代世界において，伝統的な意味での権威や共同体を求心力として頼ることなく，人間の自由を担保しながら「世界」を保守するというアーレントの構想にとって，教育は決して万能のツールとして捉えられることがあってはならないが，同時に重要な役割を果たす可能性を有している。今年度の研究では，その可能性の一端を結論として示唆するにとどまったが，今後の課題として「権威」,「伝統」,「文化」について論じたアーレントのテクストの分析を通じて，それらの積極的側面と消極的側面に関するアーレントの考えをより詳細に明らかにすることを目指していく。また，自由と保守の相剋と対応していると考えられる，行為と思考および判断の関係に関するアーレントの見解を明らかにすることで，まさにその相剋を担う教育の位置と役割に関して考察を行っていきたいと考える。

## 主要文献

H. Arendt, *The human condition*, University of Chicago Press, 1958.（『人間の条件』，志水速雄訳，中央公論社，1973，ちくま学芸文庫，1994.）

H. Arendt, *Between past and future: six exercises in political thought*, Penguin Books, 1968.（『過去と未来の間』，引田隆也，斎藤純一訳，みすず書房，1994.）

H. Arendt, *The life of mind, Thinking* (*v. 1*), *Willing* (*v. 2*), Harcourt, 1978.（『精神の生活』（上下 2 巻），佐藤和郎訳，岩波書店，1994.）

H. Arendt, *Lectures on Kant's political philosophy*, ed. Beiner, R., University of Chicago Press, 1982.（『カント政治哲学の講義』，浜田義文監訳，法政大学出版局，1987.）

エリザベス・ヤング＝ブルーエル『ハンナ・アーレント伝』，荒川幾男ほか訳 晶文社，1999.

D. R. Villa, *Arendt and Heidegger: The Fate of the Political*, Princeton Univ Press, 1995.（『アレントとハイデガー：政治的なものの運命』，青木隆嘉訳，法政大学出版局，2004.）

デーナ・R・ヴィラ『政治・哲学・恐怖：ハンナ・アレントの思想』，伊藤 誓，磯山甚一訳，法政大学出版局，2004.

マーガレット・カノヴァン『アレント政治思想の再解釈』，寺島俊穂，伊藤洋典訳，未来社，2004.

木村浩則「アレント教育論における『保守』と『革新』—ハンナ・アレントの教育理解再考」，『近代教育フォーラム』第 10 号，2001.

小玉重夫「始まりの喪失と近代：アレントにおける出生と教育」，『情況』，2000.5.

# 中国ミャオ族の「憑きもの」に関する人類学研究

陶 冶

## 1. 研究の概要・目的

「蠱」に関して，歴史文献では，「皿虫為蠱，疾如蠱」（『左伝』春秋），「以百蠱置皿中，俾相啖食，其存者為蠱」（『通志六書略』宋・鄭樵）などの記載がある。文献によれば，「蠱」は，二千年の前に，漢族の民間社会において出現した。ミャオ族は文献上でも古くから「蠱」という邪術を行うと記された。ミャオ族の社会について，「苗人能為蠱毒，其法五月五日聚毒蠱于一器之中，使相呑噬，并而為一，乃諸毒之犹者也。以之為蠱，中者立斃」（『峒溪諸苗奇俗纖志二』清）のような記述がある。そして，ミャオ族社会の慣習に対しても，漢族の古代の民間社会で行われたいわゆる「蠱」の概念を借用して記載されたに相違ない。

ミャオ族の「憑きもの」いわゆる「蠱」に関連する人類学的研究は，主に漢民族とミャオ族の民族関係に着目し，特に 18，19 世紀における民族間の対立やコミュニケーションでの民族境界によって生み出されるものと捉えた。例えば，人類学者ダイヤモンドも「蠱」という概念を援用し，漢族とのコミュニケーションの歴史的な文脈が着目 (Diamond 1988)，ほぼ邪術 (sorcery) と捉えた。それらの研究において，「蠱」という現象に対して，それがミャオ族側の社会に存在する状況や，当事者側の視点をあまり重視していなかった。

以上の問題意識を踏まえて，本研究は，民間信仰の角度からミャオ族の「憑きもの」いわゆる「蠱」に相当する民俗概念や，その現象と親族関係や村落移民史との関わりなどについて記述し論じる。